

The Widows of Eastwick : 老いの苦境を超克する物語

著者	柏原 和子
雑誌名	研究論集
巻	100
ページ	39-55
発行年	2014-09
URL	http://doi.org/10.18956/00006040

The Widows of Eastwick

— 老いの苦境を超克する物語

柏原和子

要旨

John Updike の最後の小説 *The Widows of Eastwick* は必ずしも評価の高い作品ではないが、これを主人公 Alexandra が老いの苦境を超克する物語として読むことにより、新たな側面が開けることを論証する。高齢になり未亡人となった Alexandra は自己の存在価値を見失い、社会から疎外され、死の恐怖に苛まれるという老いの苦境の中にいる。30余年前に魔女として犯した罪を償おうとイーストウィックの町に戻るが、娘一家との交流の中で、自分が生命の連鎖に連なっていることを認識し、自己の存在意義を確信する。疎遠になっていた自然とも和解し、ニュー・メキシコに戻った彼女は老いも死も自然の摂理として受容できるようになる。最後に Alexandra が到達した心境は老いの苦境の超克を表すものであり、そこには作者 Updike の世界観も見られる。

キーワード：老い、ジョン、アップダイク、*The Widows of Eastwick*、魔女

I. はじめに

2008年に出版された John Updike の最後の小説 *The Widows of Eastwick* は *The Witches of Eastwick* (1984) の続編である。アメリカン・ポップカルチャーにもインパクトを与えた前作は、ハリウッドで映画化までされ、ミュージカルとして脚色された舞台はブロードウェイで人気の上演作品となった。しかしながら続編の方は必ずしも人気のある小説ではないようである。出版当初に出た書評には、“Dazzling Updikean prose . . . Here’s a bet his work will keep fresh for generations, inciting laughter, wonder and sensuous shivers.” (Maristed) あるいは “At the fantastically high level at which he undertakes [the] registration [of the world], it is alchemy enough.” (Mars-Jones) といった賛辞とともに、数々の否定的な言説が並ぶ。Michiko Kakutani は “this imperfect novel” (C8) と呼び、Matt Thorne は前作と比較して “While ‘Witches’ was ebullient and exciting, ‘Widows’ is portentous and dull.” と評し、James Wolcott に至っては “Skip the first third of the novel, flip to page 121 in the hymnal, and begin there.” と小説前半の退屈さを非難している。Updike 研究者の間でも、この作品の評価は高くないようであり、それは出版後5年以上が経過した現在、いまだにこの作品に関する

る本格的論考は一本も活字になっていないという事実からも推し量ることができる。

70歳を過ぎてからの Updike の作品はたしかに退屈なものが多くなった。構成の甘さに加え、まるで自分が見たこと、感じたこと、考えたことをすべて記録しようとするかのように、ただらと続く文章には、Wolcott でなくとも辟易してしまう。しかし、Updike が作品にその折々の自己メッセージを込める作家であることを考慮すると、この最後の長編小説にも彼が伝えたかった何らかのメッセージが込められていると考えるべきである。そのメッセージとは “the whole mass of middling hidden, troubled America” (Tanenhaus BR11) を描くことだったのか、それとも 3 人の女性たちの老いの姿と、イーストウィックの町や住民たちの変化を語ることにより、“Into the ground is where everything in *Widows* is irreversibly heading . . . Updike eulogises entropy American-style with a resigned, paternal, disappointed affection” (Wolcott) と人や国の衰退を嘆くことだったのだろうか。そのような単純な読みをすれば、確かにこの小説は駄作であり、読むに値しないと言えるかもしれない。しかし、この小説を主人公 Alexandra の「老い」の超克の物語として読むと、そこには違ったメッセージが見えてくるし、前半の一見、退屈に思える彼女の旅行記の中にも、後半につながるメッセージの伏線が敷かれていることが分かる。本論では、Alexandra をはじめとする 3 人のヒロインたちの老いの表象を分析することにより、現代アメリカ社会における女性の老いの状況がどのようなものであるかを考察し、Alexandra が最後に到達した心境が老いの苦境の超克であることを論証する。

II. 現代社会における「老い」の苦境

21世紀の今、少子高齢化が急速に進む物質主義社会では、老いは一般的に否定的に捉えられている。社会学者の David E. Stannard は現代のアメリカ社会を「生産および消費能力の程度と様式により人の価値を量る社会」と呼び、社会的価値の中心的評価基準である生産・消費活動に従事する能力が乏しいという理由で、高齢者たちの社会的価値を低下させ軽視する社会であると述べている。そして、そのような社会において自分の生産・消費能力が奪い去られ将来的にも取り戻す見込みはないと分かった高齢者は、非常に複雑な苦境に陥ると述べている (13)。

さらにアメリカ社会では19世紀に生まれた「若さ崇拜」が老いの苦境に拍車をかける。1830年代から南北戦争の頃に、アメリカ社会は革命的な社会変化を経験した。科学の出現が知識の源を年長者の経験と知恵から科学的知識へとシフトさせ、工業化と近代工場システムは年長者の経験より、若者の強さ、スタミナ、機敏さを重んじるようになった。20世紀に入り、テクノロジー主導の経済社会が完成すると、生産現場における高齢者の居場所はさらになくなることになる。効率を重視する社会では、年を取り、肉体的にも精神的にも衰えた高齢者は若者に道を譲ることを要求されるのである。それに伴って社会に定着していった「若さ崇拜」は20世紀

になると急速に発達し、1960年代にもっとも極端になった。60歳を過ぎた男女が若者と同じ服装や髪型で装うようになり、彼らのうち、自分のことを老人だと考える者は3分の1に過ぎず、ティーンエイジャーと変わらないという自己イメージを抱いている者も多いという（Fischer 133-34）。この状況は21世紀の今日まで続いていると思われ、gerontophobia（老齡恐怖症）という言葉も生まれるほどアメリカ人は若さに固執するが、これは年を重ねることに対し、価値を見出さない現代アメリカ社会の価値観に由来する。

老人が経験と知恵を持った存在として敬われていた植民地時代とは違って、現代社会においては「古い」は苦境なのである。¹ この苦境とは肉体的・精神的衰えの自覚に加え、自己の存在価値が社会の中に見出せないゆえの苦境である。

Ⅲ. 魔女たちの「古い」—Alexandraを中心に

The Widows of Eastwick のヒロイン Alexandra もこの古いの苦境の中にいる。1970年代初頭に舞台が置かれた前作 *The Witches of Eastwick* では全員、30代であった3人の魔女たち Alexandra, Jane, Sukie はこの続編では70代前後になっており、最年長の Alexandra は74歳である。この30余年間、3人は魔女としての過去や魔法の使用を封印し、前作の最後でそれぞれが得た再婚相手とともに家庭の幸福の中で生きてきた。小説の前半は3人が“widows”となって再会し、“witches”として再び活動を開始するまでの、彼女たちの「古い」の状況が語られる。再婚相手の Jim Farlander を最近、亡くして未亡人となった Alexandra がカナダへの団体旅行に参加するところから物語は始まる。カップル単位で行動するアメリカ人社会では、女性一人での参加は居心地の悪いものらしい。Alexandra は傍らに夫がいないことで、“Throughout this trip she had been most conscious of all the isolating space around her. Jim’s absence formed a transparent shield over what she was seeing . . .” (24) と孤独感を味わう。やはり一人で参加していた男性 Willard が彼女に優しくしてくれ、亡夫に似た雰囲気を持つ彼を、彼女も好もしく思うが、まもなく彼はゲイであることが分かる。Alexandra は安堵と同時に憤りを感じるが、すぐに次のように考え直す。

Willard was one of those. She’d been fooled before. She felt some relief and some resentment. This fag had been wasting her time. But, then, what was her time worth? Less and less: she was an old lady, post-menopausal, on Nature’s trash-heap, having outlasted her Biblical span of seventy years. (25)

ここには生殖機能をなくし生物学的に役目を終えた自分は、自然界にとってはゴミ同然の存

在だとの否定的な自己認識がうかがえる。また未亡人の Alexandra を他のツアー客たちは気にかけて何かと面倒を見てくれようとするが、彼女は自分がまるで欠陥のある人間として扱われているような気がする。食事時に他のツアー客と一緒に食べるようにと誘ってくれるが、Alexandra は断って、“The time had come, its blankness told her, to take stock, to gather herself for this last life stage, a sprint to the grave in widow’s weeds” (28) と思いながら、一人で壁に向かって食事を取る。すなわち彼女は社会的に価値のなくなった自分は、人生最後のステージに来ており、後は、死に向かってラストスパートをかけるだけだという悲観的な見方をしており、しかもそのように一人で孤独に生きることを人生最後の生き方として受け容れようとしているのである。

Alexandra の老いの苦境とは、夫を亡くしたことで妻としての社会的役割を喪失してしまったことが大きな要因となっている。子供たちが巣立った後、唯一、自分を必要としていた夫の存在は彼女が自己の存在意義を感じるのにはかけがえのないものであった。その夫を亡くした今、社会の生産現場で、定年退職により、若者に自分の居場所を譲らざるを得なくなった高齢者と同じく、自分が価値のない存在になったという思いの中に Alexandra はいるのである。“... we’re *old*. Nobody wants us, except our grandchildren for the first half-hour of a visit” (46) というように、いとしい孫たちでさえ、会って30分も経つと自分を必要としないという現実 は Alexandra に自己の存在価値への疑念をつのらせる。この点に関しては、Sukie も “To the children [my husband’s] death is just part of Nature’s natural cycle, but to me it’s the end of my life of being important to anybody” (77) と同じことを手紙に書いている。

Alexandra の老いの苦境のもう一つの要因は疎外感である。彼女を Jane との海外旅行に駆り立てたのもこの疎外感である。

You live, she saw surrounded by more and more strangers, to whom you are a disposable apparition cluttering the view. Only someone like Jane who knew her when she was in her handsome, questing prime could forgive her now for becoming ancient. She grasped at this straw of connection. (41)

老いた今、世界を動かしているのは自分たちとは別の世代であり、知らない人たちである。彼らにとって自分は視界を邪魔する亡霊のような存在でしかない。年老いた自分は、今、生きているこの世界の中枢にかかわることはできないのである。Alexandra が、自分の絶頂期を知っている Jane とのか細い関係に縋り付いたのは、この疎外感からであった。

老いを苦境にする今一つの要因は死への恐怖である。Jane と一緒に行ったエジプト旅行でメルネプタハ王のピラミッドの中に入った Alexandra は、これが王の墓であることを思い、死

への恐怖で息が詰まりそうになる。

Alexandra was fighting for breath. As if in a misstep, in the gloomy tilted space, she deliberately brushed against Jane, to feel another warm, still-living body. *No escape*, everything around her proclaimed. No escape, however energetically and luxuriously religions make a show of rescuing us from death. There is no magic, the world is solid, clear through, like the depths of limestone above her. (69)

過去には魔女として自然現象を操ったり、人の死に加担したりしたこともあったものの、この30年間、Alexandraは魔法の力を封印して、ニュー・メキシコの田舎町で陶芸家の妻として生きてきた。直前に夫の死を経験し、自らも死に近づいている年齢であることを考えると、息詰まるような恐怖を覚え、死から救うものは何もない、宗教も役には立たないし、魔法でさえも死から救うことはできない、これが厳然たる真実なのだ彼女は悟るのである。

さらにAlexandraには30余年前から、自分が癌に侵されて死ぬのではないかという不安があった。高齢になった今、その不安はさらに大きくなっている。

Her worst fears were of cancer—your own cells turning evil, multiplying, blocking your organs with senseless scarlet cauliflowers of flesh, attacking even the intestines that had kept your excrement out of sight and smell, adding shame to pain, an artificial exterior bag to the rotting body. (146)

自分では気づかないうちに、体の内部から病魔に蝕まれ、肉体が崩壊していくという感覚は、“Another of her disagreeable sensations was that *she* was the closed container, and the spoiling was within” (155) というように、Janeにも共有されている。

このようにAlexandraは、自分は誰からも必要とされていないという自己の存在価値の喪失感、現在の世の中は自分のものではないという疎外感、そして目前に迫っている死への恐怖心を抱いて生きており、あきらめにも似た気持ちでこの状況を受け容れようとしている。JaneもまたAlexandra同様、病気と死への恐怖に苛まれていることはすでに述べたが、自分の子供たちの生活について、“it wasn't *our* world they had to survive in, competing with the people of *our* generation but *their* world, competing against the *same* [sic] little people they went to kindergarten with. And growing up with the same idiotic technology. That's where you feel old, I find . . .” (37) と言っているように、自分たちの時代は終わったと感じている。3人のうちでもっとも若く、まだ70歳に達していないSukieは、肺気腫を患っているものの一病息

災で、他の二人ほど健康に関して深刻な不安を感じていない。ただ、夫の死による自らの存在価値の低下は誰よりも痛感しているようである。先に引用した部分以外にも、“I’m utterly unimportant to everybody. I can see why the Indians—the Asian ones, not ours—invented suttee.” (104) という発言もしている。また未亡人となってから感じ始めた、世の中に対する疎外感を、“One of the sensations of being a widow was of the world being much too big—of her having misplaced whatever it was that would make it small enough to control.” (142) と、世界がコントロールできないくらい大きなものになったと言い表している。以上のように未亡人となった魔女たちは、3人とも老いの苦境の中にいるのである。

IV. 老いの苦境の超克に向けて

John Updike は基本的にリアリズムの伝統にのっとった作家である。この2作品も魔女というファンタジーの要素が加えられているものの、基本的にはリアリズムの小説として読むことができる。ここでの「魔女」はキリスト教徒が異端として裁判にかけた悪魔の手先ではなく、大地の豊穡の女神に仕える「魔女」であり、²1960～70年代に人気を博したシットコム *Bewitched* (邦題『奥さまは魔女』) のヒロイン、Samanthaのようなコミカルな魔法を使う「魔女」である。*The Witches of Eastwick* で彼女たちが使う魔法は、海辺で大声を上げて騒ぎまわる若者たちを追い払うために雷雨を起こしたり、不倫の愛人を持つ彼女たちを目の敵にし、正論を振りかざす女たちに魔法をかけ、口からピンやコインや蝶々を湧き出させたり、テニスの試合で不利になるとボールを蝙蝠やひき蛙に変身させたりといった主にいたずらの類である。ただ一度だけ、彼女たちは人の死にかかわる魔法を使ったことがあった。ニュー・ヨークから来た大金持ちという触込みの Darryl Van Horne が、離婚したシングル・マザーである3人の魔女たちそれぞれに結婚の期待を持たせた挙句、結局は若い独身の Jenny Gabriel と結婚したことに激怒した3人は Jenny の蠟人形を作って呪いの魔法をかけ、その夏の終わりに Jenny は死んでしまったのである。ただ Jenny は卵巣がんという明確な病名を持つ疾患が原因で亡くなったことや、彼女たちが呪いの儀式をする以前から Jenny が体調不良を訴えていたことを考えると、彼女が亡くなったのが魔法のせいであるとは言い切れない。しかしながら3人が Jenny に憎悪を抱き、彼女の死を願うという悪意を持って呪いの儀式をしたことは事実なのである。少なくとも Alexandra はこのことに関して強い罪の意識を感じており、30年間、魔法を封印してきたのも、長女一家が住んでいるイーストウィックの町に一度も行かなかったのも、この罪の意識のせいであった。

Alexandra にとって、この30余年間の生活は、魔法を封印してきただけでなく、芸術家としての自分の仕事も封印してきた年月であった。夫の Jim が窯を共有するのを嫌がったの

で、自分の作品を焼くことができなかつたからである。旅行好きの Alexandra であったが、Jim が家にいるのを好み遠出したがらないので、結婚生活の間、ほとんど旅行はしなかつた。Alexandra は Jim を支える忠実な妻として、本来の自分を抑えて暮らしてきたのである。そして今、かつては自分の味方であった自然に対して “a conscienceless killer, spendthrift and blind” (8) として不信の念を抱いている。

今までの生活を特に不幸だと思ふこともなく過ごしてきた Alexandra は老いの苦境も一種のあきらめの境地で受け容れようとしているが、Jane や Sukie と再び一緒に過ごすことにより、Alexandra に変化が生まれる。エジプト旅行中に Jane がまだ魔法が使えるかどうか試すために蝙蝠を死なせたとき、Alexandra は “Oh, Jane. After what we did to poor Jenny, I can't bear to think there's anything to it. Hexes and curses and so on. I want to believe we didn't do anything” (65) と彼女を非難する。しかし次に 3 人で行った中国旅行では、魔法で兵馬俑を動かしてガイドの Mr. Muir を驚かせるいたずらには Alexandra も加わっている。この Alexandra の変化は、Sukie を加えて 3 人になったことで、かつて一緒に魔法を行った 3 人組の魔女の心境に戻り、彼女は “in their company she felt more powerful, more deeply appreciated, more positively enjoyed” (90) と、老いの苦境に耐えるだけの人生から抜け出すことで、もたらされたものであった。

Alexandra はイーストウィックで過ごした 30 代の時期が自分の最盛期であったと感じていた。当時、彼女は離婚したものの愛人との恋を楽しみ、陶芸家・彫刻家として自分の作りたい作品、すなわち “bubbies” と呼んでいた自らの姿を投影したような女性像を作り、それで生計を立てていた。そして魔女として自然の女神に愛されていると感じ、自然に対する支配力を持っていた。Jane と Sukie も同じように、それぞれチェリストとジャーナリストとしての仕事を持ち、次々と愛人を作って恋愛をし、時には 3 人で魔法の力を楽しむという充実した生活を送っていた。Darryl Van Horne が現れるまで、彼女たちはまさに自分の能力をフルに発揮し、自分らしく生きる自己実現の生活を楽しんでいたのである。その最盛期を知っている二人と一緒にいることで、Alexandra はより力強く、より深く評価され、より積極的に楽しめると感じるのである。人間的に他の 2 人に及ばないところがあるものの、魔女としては 3 人の中では Alexandra がリーダー格であった。

Yet she somehow reigned over the others, as a broader conduit into the subterranean flow of Nature, that dark countercurrent to patriarchal tyranny which witchcraft drew upon. It was chemistry: without her as catalyst, the dangerous, empowering reaction did not occur. (90)

いたずら程度のものならともかく、大事な魔法を行う際には大地の女神と交信できる Alexandra の力が不可欠なのである。今なお、その立場は変わらないことを認識し、2人と一緒にいることで、本来の自分に戻ることができる、最盛期の自分を取り戻すことができると Alexandra は気づいた。

しかし本来の自分に戻れる場所イーストウィックに帰るのは Alexandra にとって簡単なことではなかった。Jenny の件に関して、彼女ほど罪の意識を感じていない Jane や Sukie が一夏を思い出の地イーストウィックで過ごすことを提案するが、Alexandra は “We killed Jenny Gabriel, that’s what we did. After bewitching Clyde’s wife so that he killed her with a poker and then hung himself” (109) と言い、あくまでもその誘いに抵抗する。実は Alexandra がイーストウィックに戻りたくない理由は Jenny の一件のみではなかった。イーストウィックに住む長女 Marcy との関係がうまくいっていないことがもう一つの理由である。Jenny の一件が起こったとき、Marcy は17歳であり、母の悪事に気付いていたはずだと Alexandra は思っている。Jim と再婚してニュー・メキシコへ引っ越すとき、4人の子供のうち、Marcy だけはついて来なかったが、それが母の罪を非難する証拠だと Alexandra は考えているのである。そして Marcy と話すときには、非難される前に自分を擁護しようとしてつい、相手を非難してしまう。

Marcy から電話がかかってきたときも、やはり口論になってしまうが、娘と話しているうちに Alexandra はあることに気づく。

At least it was conversation; it was something happening, Marcy spilling out all this absurd resentment, as if her mother were God and had created the universe. In New Mexico, since Jim’s death and even before, Alexandra had battled spells of depression. The dryness of her aging skin, the thinness of the desert vegetation upon the depth of rocks and minerals, the monotony of the sunny days, the mountain wins hollowing her out, Nature’s grand desolation unsoftened: it all added up to a fearful weight to push through the day. In Eastwick, she had been many things—scared, ashamed, exhilarated, hopeful—but never depressed as best she could remember. (119)

ニュー・メキシコでの生活は憂鬱になることが多かったが、それは Jim の死以前でさえそうだったのだと気づき、イーストウィックでは決してふさぎ込むことはなかったということに Alexandra は思い当たる。イーストウィックは自分の最盛期を過ごした場所であるばかりではなく、自分が本来の自分でいられる場所であったということを Alexandra はここで初めて認

識したのである。

それでもなお、イーストウィック行きを渋る母に対し、Marcyは“I thought you’d care enough about me to *want* to come. We could get to know each other b-better” (120) と言って泣き、子供の頃、好きだった母の思い出として、一緒に家庭菜園の手入れをしながら、Alexandraが自然について教えてくれたことを話す。Marcyは母娘関係を修復しようとしているのである。しかも彼女は、自然とともに生きる母こそが、本来のAlexandraの姿であると感じているようである。この後、Marcyが現在、自分も庭でささやかに野菜を育てているという話をするのを聞きながら、Alexandraは聖書の数節を心の中で引用している。禁断の木の実を食べたアダムに対し神が、“*Cursed is the ground for thy sake; in sorrow shalt thou eat of it all the days of thy life; thorns also and thistles shall it bring forth to thee. In the sweat of thy face shalt thou eat bread, for dust thou art*” (121) という部分（「創世記」3: 17-19）と、カインとアベルに触れた“*Cain was a tiller of the ground, but unto Cain and to his offering He had not respect*” (121)（「創世記」4: 2, 5）の2か所である。後者の一節の後、聖書では、カインはアベルを殺し、神はその罪ゆえにカインに「土を耕しても、土はもはやお前のために作物を生み出すことはない」（「創世記」4:12）と言う部分が続く。イーストウィックのやせた土地で細々と野菜を育てるMarcyをあわれに思い、これはアダムやカインのように自分が罪を犯した報いなのだとのAlexandraの思いが伝わる。自分の罪が娘にまで影響を及ぼしているとの認識がAlexandraに“a dizzying height of parental sorrow” (121) を抱かせている。このようにAlexandraはJennyの死に関わったという罪の意識に加え、Marcyに対しても罪の意識を抱いていて非難されまいと娘を避けてきたが、ここに来て、自分の罪の報いが娘に及んでいると知り、Marcyと会わなければならないと思うようになる。

V. イーストウィック再訪—魔術による治癒

こうして3人は本来の自分を取り戻すために、自分たちが最盛期を過ごしたイーストウィックへ戻り、かつてDarryl Van Horneが住んでいたレノックス・マンションを改装したコンドミニアムに落ち着いた。しかし思ったような楽しい休暇とはならない。来る前の予想とは違い、彼女たちの昔の罪を知っている人たちが大勢、いまだにイーストウィックの町には住んでおり、3人は自分たちが歓迎されていないことをひしひしと感じる。到着後まもなく、3人は会いたくない人に次々と出くわす。Alexandraは昔の愛人の妻Gina Marinoに会い、娘のVeronicaに子供ができないのはAlexandraが嫉妬から呪いをかけているのではないかと言われ、娘を妊娠させてほしいと頼まれる。Alexandraは自分にはそんな力はないと、一度は断るが、これはGinaの結婚生活を破滅させた自分に対する復讐なのだ気づき、“I’ll do what

I can” (128) と約束する。Sukie は昔の年下の恋人 Tom Gorton に出会い、復縁を迫られる。Tom は仕事上の事故で右手が使えなくなっていた。Sukie は同情するものの、今は結婚して子供もいる Tom と今更、関係を持つ気はない。Jane は誰だかわからない「銀色の男」に電気ショックのようなもので襲われる。結局、その男は Jenny の弟の Christopher Gabriel だと分かるが、Jane はイーストウィックに来てから体調が悪く、非常に神経質になっており、彼は自分を殺しに来たのだと言い張る。

3人が再び「魔力の円錐 (the cone of power)」を立てて魔術を行うことにしたのは、イーストウィックの人々を癒すためであった。Alexandra は昔、自分たちがこの町から欲しいものを取って去ってしまったので、今度は何かをお返しする番だと言い、完全に悪意のない白魔術をすると宣言する。他の人々を癒すとともに、この魔術は3人が本来の自分を取り戻す行為でもあった。30余年前、この地で自分らしく生き生きと生活していた頃の自分に戻るために、封印してきた魔法を試してみることにしたのである。しかし Alexandra は “aware of a gnawing within her, too, a worry that her faith, so long untested, would be insufficient, and the cone would not materialize” (187) と、自分を死へと導く自然を恐れ、憎んでいる今、以前と同じ魔女としての力があるのかどうか、自信が持てないでいる。さらに彼女と他の2人の魔女たちとは魔法に対する姿勢にかなりの差がある。Alexandra は Jenny の死に関わったことに対する罪を償おうと今回の魔術に同意したのであるが、Jane も Sukie も自分たちが Jenny を殺したのではないと言い、自分たちが悪意を持って呪いの儀式を行ったことを罪であるとは考えていない。特に Jane は Alexandra 一人に Jenny の一件の責任を押しつけ、しかも今回の魔法は主に自分の体を癒すための魔法だと思っていたと、非常に利己的な発言をする。しかしどうにか魔術の儀式を行い、Alexandra はかつての愛人の娘で、その母の Gina から頼まれた Veronica の妊娠を女神に祈り、Sukie は Tom Gorton の動かなくなった手を癒すことを祈る。Jane の番になったとき、彼女はタロットカードのうち、死を表すディアボロを選んだように見えたが、その後すぐに血を吐いて倒れる。Jane が何を祈ろうとしていたのか Alexandra たちには分からないが彼女が死のカードを選んでいたのだとすれば、誰かの死を願う祈りをするつもりだったという可能性もある。

結局、最も悪意を持った魔女であった Jane は亡くなり、その死には Christopher Gabriel が関わっていたことが判明する。Alexandra と Sukie の女神への祈りは功を奏し、Veronica は妊娠し、Tom の手は感覚が戻り、回復が進む。Alexandra にとって過去の罪を償うための善い行いができたわけであるが、最盛期を過ごしたイーストウィックで過去のように魔法を使っても本来の自分には戻れないことを彼女は悟る。Veronica に妊娠を確認しに行ったとき、今夏、イーストウィックで過ごしてどうだったかを問われた Alexandra は “It was . . . useful . . . It confirmed my suspicion that I belong elsewhere. There was less here than I remembered”

(288) と答え、もはやイーストウィックは自分が本来の自分でいられる場所ではないと言っている。

VI. Alexandraの老いの超克

自分が最盛期を過ごしたイーストウィックに戻って、本来の自分を取り戻すという試みは失敗に終わった。魔術は成功したものの、それによって Alexandra が自分の存在意義を確信することはなかったのである。Veronica に対しても、自分の祈りが功を奏したことを喜びながらも、自然が妊娠させたのであり、功績は自分ではなく、Veronica の夫や彼女が信じる聖母マリアのものだと言う。かつての輝いていた時期の自分を取り戻すことはできず、しかも魔女仲間の一人を失ったにもかかわらず、イーストウィックを去る時の Alexandra は決して落ち込んではいない。それには3つの要因がある。

自己の存在価値を見失っていたことが彼女の老いの苦境の最大の原因であったが、娘の Marcy の家を訪れた時に、その存在価値を確信する瞬間に出会う。9歳の孫息子からの “We all like you, Grandama” (272) という言葉や、娘婿が Alexandra の体調を心配して医者の子約を取ってくれようとする気遣いに接し、今まで自分の罪の意識から疎遠にしていた娘の家族から暖かく迎えてもらえるという思いがけない喜びに戸惑う。その後、イーストウィックに戻ってきた理由として Alexandra が “Perhaps it was to face what we did here. To make it right, or less wrong, before we—” (273) と言葉を切ったところで、孫息子の Howard が無邪気に “Die!” と叫んで Marcy に叱られる場面がある。死を恐れていた Alexandra は、しかしながら、ここで落ち込むどころか次のように新たな認識を得る。

But in the child's saying the unsayable Alexandra saw that right here, in front of her, was one answer to death—her genes living on. The tussle of family life, the clumsy accommodations and forgivingness of it, the comedy of membership in a club that has to take you in at the moment of birth . . . Alexandra pictured levels and layers of inheritance and affinity invisibly ramifying, cards dealt out to absent and dead and yet-to-be-born players. Everybody gets a hand. (273)

ここにいる娘や孫息子たちは Alexandra の遺伝子を受け継ぐ者たちであり、彼女が死んでも彼女の遺伝子は生き続けるということに、Alexandra は気づいたのである。その後、皆で Marcy が用意した食事を取りながら、自分が産んだ4人の子供たちに次々と思いを馳せ、彼女はこの世の真実を悟る。

He [her younger son] had pacified his brain with drugs while she had been wantonly seeking self-fulfillment in witchcraft. Nature, behind her back, in spite of her, had been bringing to ripeness her true self-fulfillment, her offspring and their offspring, those who amid the globe's billions owed her their being, as she owed them her genetic perpetuation. (274)

Janeの葬式からの帰りに、AlexandraはSukieに対して自分のイーストウィックでの過去の生活を振り返りながら、“The bubbies were *mine*; the babies were something Oz and Nature made me have. . . I felt taken advantage of. *Used*. I didn't *want* to be somebody else's milk wagon” (232) と言い、自分の子供たちより、自分自身が大切だったと打ち明けている。当時のAlexandraは魔術によって自己実現が可能になると考えていたが、自然は彼女の意志にはお構いなしに、彼女の背後で真の自己実現を円熟へと導いてきていた。彼女が産んだ子供たちがさらに子供を産み、それぞれがそれぞれの場所で生の営みを行っている。彼女が存在しなければ子や孫は存在しなかった。彼女の子孫たちはその存在を彼女に負っているのであり、今後も永遠に続く生命の連鎖に、彼女も連なっているのである。生命の連鎖の中に自分も加わっているということは、自分一人の存在を超えて太古の昔から永劫の未来へ続く、大きな人類の営みの中に自分が加わっているということである。自分の遺伝子を子孫に伝え、生命の連鎖に連なったことで、Alexandraはたしかに意義のある存在となったのである。これが自然が行った真の自己実現であり、Alexandraは自分の存在は意味のないものではないと、ここで実感することができた。

第2の要因は自然との和解である。イーストウィックで魔女として生きていた時には疑いもなく自然は味方であったが、小説の冒頭では“Alexandra's relation to Nature had always puzzled her; she leaned on Nature, she learned from it, she *was* it, and yet there was something in her, something else, that feared and hated it” (17) と自然に対して複雑な感情を抱いている。Janeに“You're a force of Nature”と言われた時も、“I'm not sure I like Nature any more. She's too cruel. As to not loving me . . .” (36) と答え、今では自然に愛されていないと感じている。Marcyが自然のことを教えてくれる母が好きだったと言った時には、Alexandraは“I used to think Nature was on my side. Now I doubt it” (120) と、かつての自分と自然との関わりが変化してしまっていることを表している。ニュー・メキシコに来て以来、魔法をやめただけでなく、陶芸をやめたので土をこねることもなくなり、菜園で野菜を育てることもしなくなったAlexandraは自然とは疎遠になっていたのだ。自然は肉体的老化をもたらし、内部から病魔により蝕み、死を与えるものとなってしまっていた。Marcyに自分が何を

恐れているかを言うときに、Alexandraは恐ろしくて「癌」という単語を口にすることができず、代わりに「自然」と言う言葉を使っているところにも、自然は自分に死を与える存在であるとの認識がうかがえる。

ところが自分の知らぬ間に、自然はAlexandraの人生を円熟へと導いてくれていた。自分が自然の営みの一部であり、自分の死後も遺伝子は子孫に受け継がれる。ここに自己の存在意義を見出したAlexandraにとって、もはや自然は自分の敵ではなかった。自分の存在価値を認識した瞬間は自然との和解の瞬間でもあった。Veronicaの妊娠を確かめに行ったとき、流産を心配する彼女に対してAlexandraは“Nature doesn't want us to lose babies. It wants us to hang in there” (286) と言い、さらにAlexandraが妊娠させてくれたと思っているVeronicaに“Nature's doing it; there's no proof I did anything. There never is” (287) と、自然がそうさせたのだと強調する。そしてニュー・メキシコに帰ったAlexandraはニュー・イングランドほど瑞々しくも美しくもない西部の景色を“the same dull but beloved Western palette” (304) と愛情を込めて眺め、夫Jimの死による心の傷も癒えていくだろうと思えるようになっている。陶芸と彫刻の仕事を再開し、土に触れるようになった彼女は自然との関わりを回復し、“Alexandra felt better, more herself” (306) とイーストウィックではなく、ここニュー・メキシコのタオスでこそ自分らしく生きられることを感じている。

最後に、死への恐怖の克服が挙げられる。死や癌への恐怖心は作品のそこかしこに見られるが、特にJaneの死後、次は自分の番だとの思いがAlexandraの死の恐怖をかき立てる。

Jane was gone; she, Alexandra, would be next. Already, from the remote provinces of her body, her numb feet and the disused interior of her womb, bulletins foretelling her death kept arriving; fits of dizziness and nausea signaled that her organic fabric was rubbing thin; the wall between inner and outer had become permeable. Tears broke down her face. (222)

実際、この後、Janeと同じ電磁波ショックで攻撃されたAlexandraは体調が悪くなる。SukieがChris Gabrielに近づいて聞き出したところによれば、この電磁波ショックは彼がDarryl Van Horneから譲り受け、自ら改良した銃により与えたもので、体内の電子の流れに影響を及ぼすことにより、体調を悪化させるというものであった。Alexandraを守ろうとSukieがChrisとの関係を深めたため、Alexandraがこのショックを受けることはなくなっていく。それにもかかわらず、彼女の体調は悪化したままで、何週間ぶりかで会ったMarcyが驚くほど痩せている。彼女は自然の摂理としての死を受け容れようとするが、頭では分かっているものの、恐怖は消えない。それは次の言葉に表されている。“I've always been afraid of

... Nature [cancer]. The way it kills you when things inside get just a little bit off. Don't mind me—I'm an old lady. I should be getting used to dying, it's very immature not to." (271) しかし上述したように、この後、孫息子の一言をきっかけに、自分の死への答えを Alexandra は見出す。自分が死んでも自分の遺伝子は子孫に受け継がれていくことに気づいた時、自分の生と死は自分一人のものではなく、自然の摂理の中、生命の連鎖をつなげる役割を持つ十分に意味のあるものだと彼女は悟るのである。大きな時の流れの中での自分の存在価値を確信したことにより、Alexandra の死への恐怖は和らいだ。

以上のように、最初の予想とは違った形ではあったが、イーストウィックで Alexandra は自己の存在意義を確認することができた。自然とも和解し、タオスへ戻り、仕事を始め、本来の自分を取り戻した Alexandra の体調不良は治まり、食欲も戻ってきた。

Her feet seemed less numb, though she still stumbled on uneven ground, and struggled to get up from her sofa. She was an old lady, all right; there was no dodging that. Death was around the corner But back in the West she didn't feel old. She felt like one of those bursting white thunderheads that don't collapse into rain no matter how high they climb above the mountains. (306)

老化による肉体的衰えは感じているし、死がすぐそこまでやってきていることも分かってはいるが、以前のように恐怖に苛まれることも、落ち込むこともない Alexandra の姿がここには見られる。彼女は老いの苦境を超克したのである。

VII. 結び

Updike の他の高齢者を主人公に据えた作品と違って、この作品では肉体的老化、特に容姿の衰えが苛酷なまでに詳細に何度も描写される。特に魔法を行う場面では全裸になった 3 人の魔女たちの老いの特徴がカタログのリストのように並べられる。

The hair on their forearms stood erect as if electrified; their eyes helplessly fed on the wrinkles, the wars and scars, the keratosis and liver spots, the slack muscles and patches of crêpey skin crinkled like smooth water touched by a breath of wind, the varicose veins and arthritic deformations with which time had overlaid their old beauty. (193)

しかし彼女たちはこのような肉体的老化を苦しんでいる風には見えない。何らかのアンチ・エイジングのための手立てを講じているようでもない。彼女たちにとって、老いの苦境の原因としての肉体的老化の優先順位はかなり低そうである。これは男性作家である Updike が女性の老いを描く限界なのかも知れないが、老いの苦境の大きな原因は肉体の問題ではなく、精神の問題であるという作家のメッセージであるとも受け取れる。主人公の Alexandra にとって最も大きな苦境の原因は自分の存在価値を認識できないということであった。誰からも必要とされない、誰の役にも立たないと感じるほど、社会に生きる人間にとってつらいことはない。Alexandra は自分が生命の連鎖に連なっており、自分の遺伝子がまだ見ぬ子孫にまで伝えられることに、存在意義を見出すことによって、この問題を解決した。彼女は「自然」に必要とされていたのである。人類の生命のリンクを途切れさせないことにおいて、Alexandra は自分の存在価値を確信し、またそれは疎遠になっていた自然との和解の瞬間でもあった。Marcy が見抜いていたように Alexandra は自然とともに生きる人間であった。タオスに帰って陶芸という土と触れ合う仕事を再開することにより、Alexandra は本来の自分を取り戻し、社会での居場所も取り戻した。社会の中核にいるのではないが、芸術家仲間からの要求や誘いの電話も鳴り始め、疎外感も緩和された。死への恐怖もなくなり、上に引用した “She was an old lady, all right; there was no dodging that” という言葉には、現在のあるがままの自分を受け容れて生きて行こうとする Alexandra の決意が感じられる。

この小説には Nature という語が50回以上も登場する。最初は疎遠になり、恐れ、憎みさえしていた Nature が実は、Alexandra の知らないところで彼女の自己実現を円熟へと導いてくれていたと知り、再び Nature を受け容れ、Nature とともに生きていくことを選択する。Nature を受け容れられるようになったことで、死の恐怖もなくなる。大地の豊穡の女神を信奉する Alexandra にとって、ここでの Nature とは女神が司る「大自然」を意味している。しかし最後に到達した心境では Nature をキリスト教的な「造物主」の意味に取っても矛盾しない。ルター派教会員の家庭に育った Updike は数多くのインタビューの中で、ルター派の「この世を受け容れる姿勢」を自分も持っているとして述べており、エッセイ集 *Self-Consciousness* の中でも次のように述べている。

Down-dirty sex and the bloody mess of war and the desperate effort of faith all belonged to a dark necessary underside of reality that I felt should not be merely ignored, or risen above, or disdained. These shameful things were intrinsic to life, and . . . they must be faced, it seemed to me, and even embraced. (129)

不完全で墮落してはいてもこの世をそのまま受け容れなければならないとするこの姿勢の裏に

は、この世界は不完全な部分も墮落した部分もすべて神によって創造されたものであり、それゆえ、すべてが神によって是認されているとする Updike の世界観がある。³ したがって老いや死も神の創造物として受容しなければならないのである。そしてその受容を可能にするのは自分自身が神の創造した世界の一部であり、神から受け容れられているという意識である。Alexandra の最後の姿には Updike が変わらず晩年まで持ち続けたこの世界観が投影されている。彼女も自分が Nature の一部であり、Nature から受け容れられていると感ずることで、老いや死を受容できるようになったのである。

このように、*The Widows of Eastwick* は衰退したアメリカを描いた単純な物語などではなく、ヒロイン Alexandra が老いの苦境を超克する物語であり、現代社会において誰もが陥りがちな老いの苦境をどのようにすれば克服できるかという問いに答える重要な作品であると言える。そしてそれは、この作品のリリース・キャンペーン中に肺がんと診断され、その約 2 か月後にこの世を去ってしまった Updike の残した最後のメッセージでもあったのである。

注

- 1 アメリカ社会における高齢者観の変遷については、Karen A. Conner が *Aging America: Issues Facing an Aging Society* の中で詳述している。また柏原和子「高齢者差別社会における『老い』の受容—ジョン・アップダイクの描く『老い』」も参照のこと。
- 2 魔女の観念はキリスト教によって征服されたゲルマンあるいはケルト民族の母性宗教の女神像にその源をたどることができる。父性宗教であるキリスト教が各地を征服するとその地に根付いていた母性宗教の女神は邪教の魔女に貶められてしまったのである。魔女の概念については次の書物を参考にした。上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考』、フェルナンド・ヒメネス・デル・オソ【図説世界魔女百科】。
- 3 Updike の世界観については柏原和子「John Updike の現実受容の世界観—Saul Bellow との比較において」および「高齢者差別社会における『老い』の受容—ジョン・アップダイクの描く『老い』」を参照のこと。

参考文献

- Conner, Karen A. *Aging America: Issues Facing an Aging Society*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1992. Print.
- Fischer, David Hackett. *Growing Old in America*. New York: Oxford UP, 1977. Print.
- Kakutani, Michiko. "Old Black Magic Is Old, and So Are These Witches." *The New York Times* 20 Oct. 2008, C1, 8. Print.

- Maristed, Kai. "‘The Widows of Eastwick’ by John Updike." *Los Angeles Times* 27 Oct. 2008. Web. 2 Feb. 2014.
- Mars-Jones, Adam. "Withered Witches on the Wane." *The Observer* 2 Nov. 2008. Web. 2 Feb. 2014.
- Stannard, David E. "Growing Up and Growing Old: Dilemmas of Aging in Bureaucratic America." *Aging and the Elderly: Humanistic Perspectives in Gerontology*. Ed. Stuart F. Spicker et al. Atlantic Highlands, NJ: Humanities Press, 1978. Print.
- Tanenhau, Sam. "Mr. Wizard." *The New York Times* 26 Oct. 2008, BR1, 10-11. Print.
- Thorne, Matt. "The Widows of Eastwick, By John Updike." *The Independent* 31 Oct. 2008. Web. 2 Feb. 2014.
- Updike, John. *The Widows of Eastwick*. New York: Knopf, 2008. Print.
- _____. *The Witches of Eastwick*. New York: Fawcett Crest, 1984. Print.
- _____. *Self-Consciousness: Memoirs*. Harmondsworth: Penguin, 1990. Print.
- Wolcott, James. "Caretaker / Pallbearer." *London Review of Books* Vol 31 No. 1, 1 Jan. 2009. Web. 2 Feb. 2014.
- 上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考』講談社、1998年。
- 柏原和子「John Updikeの現実受容の世界観—Saul Bellowとの比較において」『関西外国語大学研究論集』第90号（関西外国語大学、2010年）、1-14頁。
- _____「高齢者差別社会における『古い』の受容—ジョン・アップダイクの描く『古い』」『アメリカ文学における「古い」の政治学』松籟社、2012年、225-48頁。
- フェルナンド・ヒメネス・デル・オン（蔵持不三也・杉谷綾子訳）『図説世界魔女百科』原書店、1997年。

（かしはら・かずこ 外国語学部教授）